

## インド総選挙（566号）

2024年 7月 石館

インド総選挙（下院 543議席）は6月5日、全議席が確定した。モディ首相の率いるインド人民党（BJP）が大幅に議席を減らし、単独過半数に届かなかった。

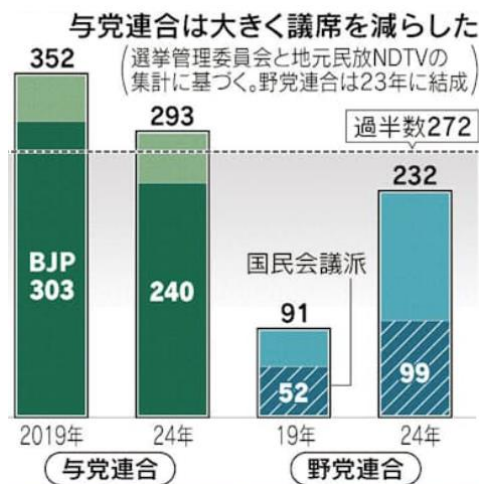


た。経済成長に取り残された低所得層や宗教的少数者の不満が予想外の結果をもたらした。

インドの面積は日本の約8.8倍、人口は中国を抜いて世界一の14億超

また GDP は来年には日本を抜くかもしれないと言われている。宗教はヒンデュー教徒約80%、イスラム教徒約14%、キリスト教徒約2.

3%



赤色のグジャラート州はモディ首相の出身地。

BJPの獲得議席は240議席と前回2019年の303議席から大幅に減った。単独過半数を逃すのはモディ氏の首相就任後初めてだ。ラルフ・ガンジー氏が実質的に率いる野党連合の中核、国民会議派は99議席と前回からほぼ倍増させた。BJPは協力政党を含む与党連合として293議席と過半数(272)を確保したものの、政権運営への影響は必至だ。



BJPの得票率は36.6%と前回の37.3%と小幅な低下にとどまったものの、インドの下院は小選挙区制を採用しており、わずかな票差で

野党に敗れるケースが相次いだ。事前の予想では BJP の単独過半数が確実視されていた。

想定外の議席減を招いた要因はいくつかの誤算の重なりだ。インドは人口増加を背景に足元で高い成長率を記録し、IMF の予測では GDP で 25 年に日本を上回る見込みだ。一方一人当たりの所得水準は低い。モディ氏の政策が成長の恩恵が届かない低所得層から反発を受けた可能性がある。

小生は日本・インド経済委員会の委員をやっていたこともあり、会社の仕事以外でも、この委員会に出るため何回もインドを訪問してきた。そんなこともあり今までレジメで何回か、カースト制度、貧富の格差、教育制度、ヨガ、などについて書いてきた。しかし世界 1 の人口を誇るこの国は奥が深く、ほんの一部の側面に触れたに過ぎない。



演説するモディ首相

今回のインドの総選挙は、有権者数が約 9 億 7 0 0 0 万人の“世界最大の選挙”で 4 月 1 9 日から全土で 7 回に分けて投票が実施された。

BJP を中心とする与党連合に、国民会議派などの野党連合“インド国家開発包括同盟 (INDIA) が挑む構図だった。BJP は高い経済成長率を達成した実績や”グローバルサウス“と呼ばれる新興・途上国の盟主としての国際社会での地位向上をアピールした。BJP は 19 年の前回選挙で獲得した単独過半数は問題なくクリアすると楽観論が支配していた。

しかし蓋を開けてみたら、与党が予想外に苦戦し、BJP の単独過半数は達成できず、与党連合で辛うじて過半数を維持できた。選挙戦で BJP はモディ政権下で高い経済成長率を達成した実績をアピールする一方、野党はモディ氏が財閥を優遇した結果、経済格差が拡大したと批判した。高成長の恩恵を享受できていない貧困層などの票が野党に回ったとみられる。

モディ政権は中国を抜いて世界一となった約 14 億人の人口を背景に外国資本

を呼び込み、労働者の収入を高めて消費を増やす好循環を描いていた。しかし実現には克服しなければならない課題がいくつもある。インドでは若年層の失業率の高さが問題となっている。毎年1000万人から1200万人が労働市場に加わる。同国の産業構造はサービス分野の比率が高く、付加価値が高く雇用も多く生み出す製造業の育成が急務だ。

インドが抱える課題	
経済	製造業の育成
	外資誘致策の一層の拡充
	インフラ整備
外交	シーク教指導者を巡る問題でこじれた米・カナダとの関係改善
	中国との国境紛争
内政	統一民法の制定
	イスラム教徒を含む国民融和
	貧富の格差是正

モディ政権は14年の発足直後に製造業振興策“メイク・イン・インド”を掲げ、産業構造の転換を目指した。

当初はGDPに占める製造業の割合を22年までに25%に引き上げるとしたが、未達成となっている。

近年は米中対立に伴うサプライチェーンの見直しを追い風に、海外からの投資も目立ってきた。外資企業による半導体や電気自動車の工場建設計画

が相次ぐが、電力や物流などインフラが不十分であると指摘されている。

モディ氏のお膝元であるグジャラート州のようなインフラ整備が進んだ地域でも、依然として電圧の一時的低下や瞬間的な停電が起こっているという。BJPはモディ氏の3期目に向けてインフラ投資の拡大方針を示した。



インドの下町の風景

急速な経済成長を果たしたものの貧困や経済格差は深刻だ。1人当たりの名目GDPは2500ドル台で、隣国バングラディシュと同程度だ。

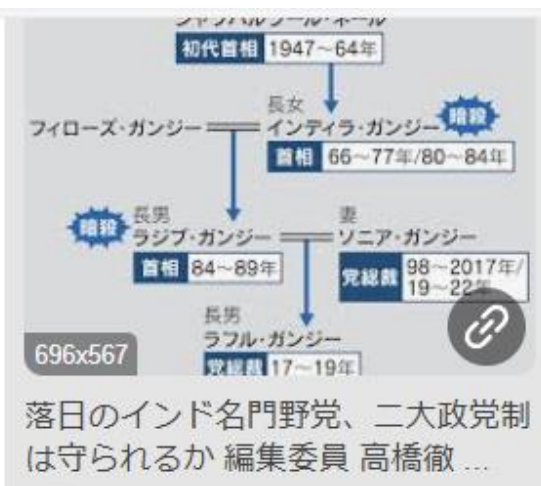
国民の4割超が世界銀行の“貧困”ライン以下で暮らす。インドは上位1%の富裕層が、同国全体の富の約40%を占めるという。

米欧と中国やロシアとの対立が深まる中、グローバルサウスを率いて第三極を作り出し、国際社会で発言力を高めようとしてきた。今や世界第一の人口を抱え、国際社会もこの人口大国を無視できなくなっており、影響力は強くなってきている。

インドの外交の基本は“戦略的自律”わかりやすく言えば良いところ取り外交で国際社会からあまり信頼されない側面もある。経済安全保障面では日米豪との枠組み“Quad”に参加する。中国との国境紛争を抱えており、民主主義陣営の一員として米国との連携を深める。

一方ウクライナ侵略を巡っては、インドは西側諸国による対ロシア制裁に加わらず、割安なロシア原油の輸入を続ける。

今回の選挙で野党連合を率いて予想に反し、大躍進したラフル・ガンジーはネール・ガンジー王朝の末裔で、インド初の女性首相インディラ・ガンジーは彼の祖母である。小生が若い頃日本・インド経済会議で彼女に挨拶したことがある



インディラ・ガンジーとネール・ガンジー王朝の系図

この王朝はネール以来インドの政治を50年近く率いてきたが、

この名門一族が再び表舞台に出てくるであろうか